

【水の作文大賞】

かけがえのない水

出水中学校 一年 坂田 莉奈

2020年は、世界で大変な年となった。今まで予想だにできなかった、新型コロナウイルスの蔓延で、各国も対策に迫られている。そのような状況の中、感染拡大を防ぐ最も有効な手段が、手洗い、うがいだと言われ、これまで以上に水が欠かせないものとなった。

ある日、私はこんな記事を見た。その記事によると、発展途上国では普段の生活に欠かせない水でさえ足りていない。ましてや、手洗い、うがいなどの基本的なコロナ対策ができるはずがないというものだった。そもそも、発展途上国では子供たちが学校に通うこともできず、私と同じ年代の子でさえ、朝から夜まで一生懸命働いている。家から遠く離れた井戸や川に長時間かけて水を汲みに行っているのだ。そのように、子供たちが集めた水も、泥や砂などでにごり、とっていい飲み水としては使えないものなのだ。

一方、日本では蛇口をひねればいつでも新鮮な水を飲むことができる。同じ地球に暮らしていても、場所が違うだけで、これほど水事情が異なるのだと改めて感じた。

日本では、そんな新鮮な水をたくさん使っている。生きていくために飲んだり食べたりして体に摂取している量は、一人一日あたり二、五から三リットル。お風呂や洗濯物、トイレといった生活用水も含めると一人一日あたり三百四十リットル。私は四大家族なので、一家庭で一日あたり千二百五十六リットルをも水を使っているということになる。

だが、私たちが消費している水は、これだけではない。目に見えないバーチャルウォーターがある。バーチャルウォーターとは、食料や畜産物を輸入する消費国が、自国でそれらを生産すると仮定した時に必要となる水の量を推定したものだ。

例えば、食パン一枚を生産するのに九十六リットルの水が必要となる。また、牛肉二百グラムに関しては、四千二百二十リットルもの水が使われているのだ。

私が思うに日本人は、飲み水や生活用水などの目に見える水だけであっても、発展途上国と比べると無駄に多く使いがちである。ましてや、食料の半分以上を輸入に頼る日本は、私の想像を絶するほどの大量の水に見えない水を間接的に輸入していたのだ。

水の惑星と呼ばれる美しい地球。今、私たちが使用している水も、古代の人々から受け継いだ大切な資源なのだ。しかし、この自然の恵みも永遠ではない。実際、2050年に世界人口の約半数が水不足にさらされると予測する人もいる。今、私たちにできる事は、自分達の想像以上に大量の水を使用しているということに自覚することだ。その上で、水のありがたさに心から感謝し、必要以上に無駄使いをしないと意識がなければならぬ。私たち一人ひとりの力は微力であるが、無力ではない。個々人の意識がけは、やがて世界中に広まり、大きな輪となるだろう。この大切な水は、一人ひとりの小さな心がけで守っていくことができると思う。